



日本甲虫学会 Coleopterological Society of Japan

HP: <http://kochugakkai.sakura.ne.jp/>

Facebook <https://www.facebook.com/coleopterology>

Twitter 日本語アカウント: <https://twitter.com/kochugakkai>

英語アカウント: https://twitter.com/Coleopt_Soc_Jpn

会員限定ページ: <http://kochugakkai.sakura.ne.jp/members-only.html>

(ユーザー名:、パスワードはさやばね和文誌さやばね 41 号(2021 年 3 月 25 日発行)およびニュースレターのメール配信版 39~49 号に掲載しています)

会長挨拶：甲虫学会に関わってきたこれまで

大原 昌宏

会長の任期、2期4年間も残すところ3ヶ月となりました。これまであまり個人的なことは書いてきませんでしたので、私と甲虫学会との関わりを少し記したいと思います。

私の甲虫学会との関わりは高校生の頃に始まります。もともと虫好きだったと思うのですが、高校生になると、私は盛んにチョウと糞虫を集めていました。遠縁に遠藤俊次さん（半翅目・鱗翅目が専門で、昆虫のイラストで著名、私の従兄弟の従兄弟にあたる）がおり、特に私の糞虫熱が強かったのか、遠藤さんは（親戚のよしみで）、糞虫専門家の益本仁雄さんと科博の黒沢良彦先生を紹介してくれました。黒沢先生から、本会の前身にもあたる甲虫談話会に入会するといいい、と勧めいただき、新宿の科博分館や上野の本館で開かれる談話会に参加し、石田正明先生、和田 薫さん、松本（伊藤） 武さんと知り合うことができました。石田先生は杉並に住んでおられ、休みの日には御宅にお邪魔をして、コガネムシの標本を見せていただき勉強をさせてもらいました。次第に甲虫への興味が増し、大学の進路を決める際、甲虫の勉強をするなら、鹿児島大学の中根猛彦先生のところが良い、と石田先生から勧められ、鹿児島大学理学部に進学しました。中根先生から甲虫学を教わるのはもちろんですが、琉球列島での甲虫採集の誘惑というのも進学の原因でした。甲虫談話会がなければ、甲虫学の道に進まなかったかもしれません。

進学後は、中根先生の研究室をしばしば訪ね甲虫学を教授していただき、サークルの生物研究会のメンバーと南九州・琉球列島の虫採りに明け暮れました。中根先生を慕って鹿大に進学してきたのは、三浦幹夫さん、高井 泰さんと私の三人です。私以外の二人は甲虫にとっても詳しく大変刺激を受けました。卒論は、中根先生から、「君は糞虫が好きだから、同じ環境にいるエンマムシをやるとよい。日本では専門家もいないから。」と勧められ、日本産のエンマムシを扱うこととしました。典型的な黒くて丸いエンマムシを調べ始め、あっという間に1年は過ぎ、エンマムシ亜科の標本の同定と種名の整理をただけの卒論となってしまいました。エンマムシ科全体の三分の一も扱わずに卒論が終わってしまったので、大学院に進むことを考え、中根先生に相談したところ、北大に行きなさい、ということになりました。

北海道大学の大学院に進学してからは、本格的に学会とつながりを持つようになり、日本昆虫学会と日本鞘翅学会（甲虫学会の前身）の二つの学会をベースに口頭発表と論文発表を続けまし

た。大学院生時代は、この二つの学会に育てていただいたといっても過言ではありません。博士課程を経て、小樽市博物館の学芸員に職を得て、研究者として学会で発表することと論文を出すことが仕事の本分となりました。その後は、北大農学部の助手となり、北大総合博物館へ助教授として異動し、大学の甲虫研究者として、教育と研究に従事しました。この間、かなり密に甲虫学会と接するようになります。大学や博物館の研究者は、学会運営という社会的責務があるようで、振り返ると人生のかなりの時間が日本甲虫学会とともにあった気がします。2回の札幌大会を開催し（溝田浩二さん、丸山宗利さん、小林憲生さん、古川恒太さん、蓑島悠介さんに大変お世話になりました）、英文誌 *Elytra* の編集幹事、編集長を経験し（編集のお話は以前の挨拶にも書かせていただきました。多くの方にお世話になりました）、さらに会長まで仰せつかったという顛末です（4年間の任期でしたが、コロナ禍もあり、あまり新しい試みができずに申し訳ありません）。

これらの学会に関わる経験が、私を大きく成長させてくれたことは間違いありません。多くの甲虫に関わる知人を得て、その人たちは私の人生にとってかけがえない先生、先輩、後輩になります。石田先生とお会いし、甲虫学に進もうと思ったきっかけも談話会ですし、私の人生のかなりの時間を割いて行ってきた学会誌の編集や学会運営という特殊な仕事も、当然、甲虫学会関係なのです。まあ、これが研究者の生活というものなのでしょう。

若い方々が、これからどのように甲虫学会との関わりを持つかわかりませんが、人生を豊かにしてくれる人の集まりとその営みであることに間違いはないと思います。同じ嗜好と興味を持つ人は、世の中にそうたくさんいるわけではないのです。学会という組織は形を変えていくかもしれませんが、そこで知り合った人々と一緒に行った活動は心に残るものです。

今後とも、日本甲虫学会をご最良によりしくお願い申し上げます。

2023・2024年度の会長および評議員選挙 投票は9月22日（木）必着です！

・開票は9月27日（火）に公開にて行われます。

年次大会・秋季地域例会の予定

（※コロナ次第で変更になることがあります。最新情報はウェブサイトをご確認ください）

<http://kochugakkai.sakura.ne.jp/event/event.html>

- ・年次大会（東京・明星大）：12月10・11日
- ・東京例会：9月17日（土）オンライン（事前申込みは本日9/16の17時まで）
- ・名古屋例会：10月9日（日）対面（状況次第で中止）
- ・大阪例会：9月24日（土）対面（状況次第でオンライン）

日本甲虫学会 ニュースレター 第50号

2022年9月16日発行 ※本ニュースレターは主にHPの更新履歴に基づき、プレーンテキストにて不定期でメール配信しています。以後の配信停止ご希望の方はご連絡ください。過去の更新履歴も、PDFでご覧いただけます。

<http://kochugakkai.sakura.ne.jp/newsletter/newsletter.html>

（web担当：初宿・山本 webmaster@kochugakkai.sakura.ne.jp）